慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評: 松本三和夫『船の科学技術革命と産業社会：イギリスと日本の比較社会学』同文館, 1995年
Sub Title	
Author	水越, 伸(Mizukoshi, Shin)
Publisher	三田社会学会
Publication year	1996
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.1 (1996.) ,p.83- 85
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19960000-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：松本三和夫『船の科学技術革命と産業社会:イギリスと日本の比較社会学』同文館,1995年

水越 伸

科学技術と社会のダイナミズムを高い解像度で描き出した労作が刊行された。

この書物は、19世紀後半から20世紀初頭にかけての、いわゆる世紀転換期という時代状況のもとで、船の科学技術と産業社会の相互作用的な展開過程がいかにして進行したかを、イギリスと日本の比較を通して論じている。筆者の松本三和夫氏は、ほぼこの10年間に発表してきた学術論文を下敷きとして、400字詰め原稿用紙で1000枚を越える大部の博士論文としてまとめたが、新たにその内容を短縮し、書き改めたという。その結実が350ページを越えるこの本となって世に問われたわけである。

この本の企図にあたって松本氏の念頭にあったことは、科学社会学の新たなパラダイムの構築であったと考えられる。従来のマートン派、新クーン派、ポスト・クーン派などの科学社会学は、流派のちがいこそあれ、ともすればいずれも科学者集団内部のダイナミズムの研究に自閉してしまいがちであった。これに対して、筆者は、科学技術と産業社会を対称的に扱い、ダイナミックに分析、把握するという立場の重要性を繰り返し強調している。たしかにこの学問的重要性は、とくに日本において何度強調されても十分と言うことはないだろう。少なくともメディア論に取り組む評者のように、科学社会学の外部にいながら、なおかつそこに関心を持つような立場の者にとっては、筆者のような企図を持っていただかない限り、問題や関心の共有をはかることはむずかしい。科学社会学が、現代社会にとってきわめて重要な対象、問題をあつかう領域であることは言うまでもない。しかし同時にこの領域が、社会学や歴史学の本流の脇にできた、動きのない、よどみのような領域にならないようにするためには、筆者のような高い志を持って取り組むことが、とても大切なことになってくるはずである。

筆者は、このパラダイム転換を企てるために、これまで理論と実証の二つのアプローチを並行させてきている。すなわち一方では科学社会学の理論的展開を検討していく。そして他方で本書のような歴史社会的実証研究を通して、新たな科学社会学の枠組みの構築をめざしているのだと言う。

さて、本書の構成のあらましを記しておこう。

まず序章において、船の科学技術革命を素材とした科学技術の比較社会学について、その概念規定と、問題設定がていねいに行われている。

第一部は、「船の科学技術革命の生成過程」を、おもに世紀転換期のイギリスの状況について検討している。評者の目を引いたのは、さまざまな制度的社会状況の転換の中で、

船の科学技術に関わる人間、あるいは人間像がいかに変化をしていったかという点である。たとえば、アマチュアから船の科学技術者への科学技術活動の中心の移行過程や、船大工と船の科学技術者の関係性が、一方から他方への変化と言った単純なものではなく、相互作用的な性質を持っていたことなどが、鮮やかに浮かび上がっている。

第二部では、第一部で描き出されたイギリスの影響を受けた日本に重点を置き、「船の科学技術革命の波及過程」について検討を加えている。ここではおもに、国家と民間企業のダイナミズムに焦点があてられている。民間企業によるC.A.パーソンズの舶用蒸気タービンの導入と、海軍によるC.G.カーチスのタービンの導入が並行し、マクロに見れば独自の合理性を備えた競合状況が存在したことが明らかにされている。

第三部「日英比較の含意」では、以上の実証分析を通じてえられた知見をもとに、イギリスと日本の科学技術導入の従来型のモデルを、批判的に乗り越える議論が展開されている。すなわち、これまでの科学技術論においては、イギリスは民間主導型、日本は国家主導型で導入、展開されてきたという図式が一般的に共有されていた。しかし事態はそれほど単純、かつ静態的なものではなかったというのである。筆者は初期の導入過程で、それぞれの国家において民間主導、国家主導と言った企図があったこと自体を否定していない。ただしその後のプロセスにおいて、この図式が変容し、結果としてみれば世紀転換期において、ほぼ同じかたちのシステム、すなわち官民複合型二極構造のもとで船の科学技術革命が展開したことを指摘した上で、なぜそうなったかについての解釈を試みている。歴史社会的文脈のもとでの科学技術革命の引き起こされた状況のちがい、そしてこの革命をめぐる科学技術教育制度、研究・開発組織、労働過程の共通点と相違点が詳しく検討されていくのである。

松本氏はこのハイライトにおいて、従来の図式を簡単に否定し、新たなキーワードを投げ与えるというようなかたちで乱暴に議論を進めるのではなく、実証的な歴史分析をがまん強く踏まえた上で、科学技術と産業社会のダイナミズムをとらえようとしている。

この本の魅力は、あえて詳細に原資料をあたることに徹することによって、科学社会学の新たな枠組みを骨太に指し示すという、きわめて角度の深い構図のもとで描き出されている点にある。この構図は、言うは易いが、築き上げることはむずかしい。筆者の真摯な努力を高く評価したい。

ただし注文を付けたいところもないではない。ここでは次の二点を挙げておきたい。

第一に、筆者が科学技術と対称的にあつかうとしている社会のイメージが、まだ狭いように思われる。筆者もその点は自覚されているらしく、「社会」ではなく、「産業社会」という限定的な用語を用いているが、ここで検討されているのは、やはり船の科学技術革命をめぐる専門的、職人的、あるいは制度的な次元における社会に限られているのではないだろうか。

具体的に言えば当時の一般大衆の眼に、船というモノ、ないしは造船という営みはどの

ように映ったのだろうか。その意味合いは、国家や階級やジェンダーのちがいによって異なっていたのだろうか。そうした意味合いの差異が引き起こすダイナミズムは、船の科学技術革命に影響を及ぼしはしなかっただろうか。評者に造船史の知識がないだけに、そういった事柄が気になってくる。

また、イギリス王室制や天皇制がこの科学技術革命に与えた影響はどのようなものだったのだろうか。たとえば、安達裕之氏の『異様の船：洋式船導入と鎖国体制』（平凡社選書、1995年）を読むと、幕末の洋式船導入にあたっては、当時の尊皇攘夷思想が大いに影響を与えていたことや、一般大衆や幕閣が洋式船を異様の船としてとらえていたことの意義が明らかにされていた。電信、電話、ラジオ、テレビと言った情報メディアを支える情報技術の生成、普及過程においても、天皇の行幸、天覧と言った儀礼が決定的な役割を果たしていた。科学技術とオリエンタリズム、オキシデンタリズムの関係なども含め、より多くの問題群や学問的パラダイムとの連関を取っていくこと、その中で科学社会学の新たなパラダイムを提唱していくことを、筆者の今後の研究に望みたい。

第二に、筆者は「平易に読めるかたちに表現したつもり」だというが、やはり本書はむずかしい。個別の議論がわかりにくいというのでは決してない。筆者はていねいに図や表を用い、論理の展開がいたずらに思弁的にならないよう細心の注意を払っている。しかし細心の注意の積み重なりは、結果として造船学や科学技術史に通じていなければ理解できないという「印象」を与えてしまっていることは、きわめて広がりのある課題を説く内容だけに残念である。このことは、学問内部に自閉するならば取るに足らないことと思われがちだが、書物の社会的機能を考えるメディア論的な立場からすれば重要な課題である。

最後に、昨今の学術出版事業がおかれている厳しい状況を考えてみるとき、出版助成があったとはいえ、このような労作の刊行を実現された出版社の姿勢を評価したい。筆者の比喩をパラフレーズして言えば、この書物の投げかけた波紋は、送り手の意図をも超えて静かに、広く拡がっていくものと思われる。

（みずこし　しん　東京大学社会情報研究所）